

## 序言

近年、日本の文学・思想研究において、それらを「日本」の枠組みに閉じ込めてしまうのではなく、東アジア、すなわちいわゆる漢字・漢文文化圏へ開いて捉えていこうという傾向が顕著である。こうした動向は、日本のみならず、中国においても同様であり、例えば「海外中国学」といった名のもとに、中国の学術文化を東アジア、あるいは世界的な視野から検討しようという研究活動がさかんに推進されている。

本書は、二〇一〇年九月二十四日から二十五日にかけて北京にて行われた「多元視野下的中国文学思想」国際学術研討会（北京師範大学文学芸学研究中心、北京師範大学文学院、北京語言大学国際漢学研究所、早稲田大学国際日本文学・文化研究所共同主催）における講演および研究発表の成果をまとめたものである。このシンポジウムは、中国教育部人文社会科学重点研究基地である北京師範大学文学芸学研究中心が主体となって企画された国際会議であるが、長年にわたり早稲田大学と学術交流のある北京師範大学文学院の張哲俊氏から、とくに日中の文学・思想に関わる分科会を設けたいという要請を受け、早稲田大学国際日本文学・文化研究所（中島国彦所長）が主催者に加わったものである。本研究所は、「世界と共創する新しい日本文学・日本文化研究」をテーマに早稲田大学重点領域研究機構の研究所として二〇〇九年に設立されたもので、本シンポジウムにはそのアジア・プロジェクトの活動の一環として参加することとなった。

分科会を組織編成するにあたっては、あえて時代やジャンルを特定せず、通時的かつ多角的に日本と中国の文学、思想に関わる諸問題を見渡すこととし、また、日本や中国以外の研究者にもとくに参加を願ひ、「世界的な視野から」日中の文化について議論が展開されることを目指した。その結果、ニュージールランドのローレンス・マルソー氏や韓国の金孝淑氏らを含む多彩な顔ぶれが集まり、発表内容も多岐にわたり、充実した分科会をたてることができた。

本書は、計十四名による論文を、その対象とする内容のおおよその時代順に並べ構成している。以下、各論の概要を簡単に紹介する。

まずは、奈良時代の文筆に関わる論文である。土佐朋子氏の「陶淵明と藤原宇合——隱者による隱逸詩の創作——」は、藤原宇合「遊吉野川」詩を主たる考察対象として取りあげ、宇合の詩が中国知識人の精神や文学的主題を継承するものであり、中でもとくに陶淵明の隱逸思想と響き合うものであることを指摘する。土佐氏は、陶淵明と宇合の共通性として、自らをあくまで現実世界とのつながりの中で隱逸を志す隱者とし、その志を實踐できる場を見出した充足感を同じく「幽居」という語句によって表出している点に注目する。そして、吉野を異界とは捉えず、現実世界において隱逸の理想を實踐できる場であると詠う宇合詩には、『懷風藻』所載の他の吉野詩とは一線を画す境地が現れているとする。

続く高松寿夫氏の「遷都平城詔」と「隋高祖建都詔」との類似を最初に指摘したのは誰か——近世の『続日本紀』研究一斑——」は、『続日本紀』に載る元明天皇の「遷都平城詔」のうち、その約七割にも及ぶ文言が、隋の高祖によって発せられた「隋高祖建都詔」に依拠するものであることについて、それを初めて指摘したのが河村秀根・益根父子の『続紀集解』であり、そうした情報が当時尾張藩内の同好の士の間で共

有されていたことを、現存する秀根手沢『続日本紀』版本や益根自筆『続紀集解』稿本等の伝本調査から明らかにする。また高松氏が注目する、秀根が『書紀集解』の編述と同時に『隋書』の存在を重視し書写していたという事実は、八世紀の日本における『日本書紀』『続日本紀』といった「史書」編纂の営みそのものが、『隋書』といかほどに関わるものであったのか、という漢籍受容をめぐるさらに大きな問題へも波及していくものであろう。

次に、思想及び宗教信仰の面からの二論考である。鈴木英之氏の「本地垂迹説における中国經典の影響——『清浄法行經』の受容をめぐる——」は、本地垂迹説と類似の論理を有する中国六朝撰述の偽經『清浄法行經』を取りあげ、中国および日本におけるその影響と受容状況について検討する。『清浄法行經』が説くのは、釈迦が仏教を広める素地を作るために先ず菩薩を老子・孔子・顔淵として派遣したのだという、いわゆる三聖派遣説である。鈴木氏は、中国、日本の各典籍への『清浄法行經』の引用状況を概観したうえで、中日の仏教書では専らそれは儒仏道三教における仏教の優位を説く際に用いられるのみであるのに対し、例えば『耀天記』といった神道書では日本に神々が垂迹した理論的根拠として新たな解釈を付与しつつ『清浄法行經』を積極的に活用している点を指摘する。

吉原浩人氏の「神として祀られる白居易——平安朝文人貴族の精神的基盤——」は、研討会の基調講演として発表されたものである。吉原氏は、平安中期から鎌倉期にかけて白居易を文殊菩薩や文曲星の精あるいは神として祀る思想が浸透していたことについて、関連する著述を当時の文献から網羅的に抽出整理するとともに、白居易を祀る影供の儀式に用いられた肖像や、尚齒会に際して掲げられた障子絵等、白居易を描いた図像が当時多数存在したはずだとし、現京都国立博物館蔵（東寺旧蔵）の「山水図屏風」がその一実例であ

ると指摘する。吉原氏はまた、平安朝文人貴族の間で何ゆえそれほど白居易を信奉する現象が起こったのかについて、仏教を篤く信仰しながらも詩文創作を営みとする彼らにとって、狂言綺語の罪を讀仏乗の因に転ずるという白居易の言辞が、自らを正当化できる精神的基盤にほかならなかったのだとする。

続いては、『源氏物語』に関わる二本の論考である。丁莉氏の「唐土、高麗と大和——『源氏物語』の異国意識、自国意識と美意識——」は、『源氏物語』における唐土、高麗、大和に関する表現と叙述に注目し、「唐」と「和」が往々にして一対をなすものとして現れること、「唐」と「高麗」とが代表的な二つの異国としてやはりしばしば並置されること、「高麗人（渤海人）」は「漢才」という異国文化の象徴として物語内に機能していることなどを、『うつほ物語』との比較を交えつつ分析していく。また、『源氏物語』においては、異国との対比によって「和」の有する「なつかし」の美が見出され、さらには、唐・高麗・大和の「調和の美」に対する意識が現れていることなど、異国と自国をめぐりさまざまに交錯する物語の眼差しが解き明かされる。

金孝淑氏の「『源氏物語』の「ひとのみかど」と「ひとのくに」——その使い分けを中心に——」は、『源氏物語』が異国の事柄を取りあげる際に用いる「ひとのみかど」と「ひとのくに」という二つの表現に注目し、それが物語においては截然と使い分けられていることを明らかにしつつ、こうした表現の分析を通して『源氏物語』が異国の先例を引用する際の態度や方法を読み取ることができると可能性を呈示する。すなわち、「ひとのくに」は、日本国内のことを指す場合もあるが、それはつねに京から遠く離れた、文化の届かない辺境に対する否定的なニュアンスを伴って用いられる語であること、一方の「ひとのみかど」は政治的ニュアンスを含み、政治家としての光源氏の権威に関わる叙述において用いられる語であることが、物語本文の丁寧な読みから示されていく。

河野貴美子「藤原敦光『三教勘注抄』の方法——音義注を中心に——」は、空海の『三教指帰』に対する平安末期の藤原敦光の注釈書『三教勘注抄』を取りあげ、敦光が注釈に際していかなる典籍を利用し、またいかなる方法と態度をもつて『三教指帰』の本文を学び継承しているのかを考察するとともに、漢文をめぐって展開された平安期の学問と著述の一具体相を明らかにしようとするもの。敦光は、宋本『玉篇』や『広韻』といった新来の字書、韻書と同時に、『文選集注』や『妙法蓮華経釈文』といった当時日本の学問世界でよく用いられた典籍を利用していること、また、とくに「賦」の部分に対して詳細な音義注が施されることや『文選』所収作品との表現の重なりを徹底的に列挙していくその注釈態度は、空海の作文の工夫や特質を的確に浮かび上がらせるものであることを指摘する。

続いては、軍記と謡曲における中国故事の受容とその自国化、日本化を論じる二論文である。マイケル・ワトソン氏の「中世日本文学における『史記』享受の実際に関する一考察——軍記物語と謡曲におけるその変容——」は、物語の本筋から離れた余談的逸話として引用される中国故事に注目し、それらの逸話が大きな語りの中にいかに組み込まれているのか、その内容や表現の特徴を考察するもの。具体的には、『平家物語』巻十「千手前」、『太平記』巻二十八「慧源禅巷南方合体事付漢楚合戦事」、謡曲「項羽」、番外謡曲「横山」および「星」に繰り返し現れる項羽と虞氏の故事が、原典である『史記』本文の上にさまざまな加工が施されていること、例えば軍記物語や謡曲に特有の類型的表現が用いられたり、編者や語り手による感情的な表現が付されたり、読み手や聞き手に受け入れられやすい型へと「自国化」が施されていることなどが明らかにされる。

丁曼氏の「謡曲「班女」における「扇」と謡曲「碁」における「碁」は、中国の詩歌や物語に端を発す

る「扇」や「砧」のイメージが、謡曲にいかに取り入れられ、また、元の中国のイメージや詞章からいかなる変化を遂げているかを考察するもの。まず「班女」の「扇」は、「怨歌行」以来中国の詩文にも日本の漢詩文にも繰り返し題材として現れる班婕妤の扇のイメージを当然継承するものであるが、中国では本来团扇であった扇が「班女」では扇子に改変されており、そのことが実際の演出へも影響を及ぼしていることが指摘される。また「砧」も、六朝の擣衣詩や白居易詩を介して日本の文学世界へ入り込んできた「異国情緒」であるが、謡曲「砧」に本来の中国史書には見られない蘇武の妻への言及があるのは、やはりこれも日本で独自に改変されたエピソードに基づくゆえだとされる。

次は、近世の文化や文学に関わる二論考である。張哲俊氏の「絵双六起源の論争と中国の彩選」は、従来中国から伝来したのか、あるいは日本で独自に形成されたのか、議論の決着をみないままであった絵双六の起源について、新資料の提示とともに中国伝来説を打ち立てる。張氏は、日本の絵双六が十五世紀中頃の仏法双六に始まること、その元となったのは唐代には既に存在していた彩選から展開した中国の選仏図であること、そして、その選仏図が宋代には行われていたことが宋・黄裳の「選仏図序」や南宋・慈照宗主の「選仏図序」等の諸資料によって確実に知られるものであることを突き止めたうえで、当時の僧侶の交流を通じて中国の選仏図が日本へ伝播したのだとする。

続くローレンス・マルソー氏の「夢の中へ——秋成作品と『列子』——」は、上田秋成と『列子』の関係に注目し、とくに秋成が夢について語るときに『列子』を意識し利用していることを、その自伝的作品である「よもつ文」を考察対象として論じる。すなわち「よもつ文」冒頭で秋成が述べる夢の「六つのけぢめ」については、従来指摘のある『周礼』春官・占夢のほかに『列子』にも記載があること、また、夢を見るの

は愚かさや心の迷いがあるゆえだと述べるところにも『列子』の内容がふまえられていることを指摘する。秋成はまた「よもつ文」において『列子』から「狂蕩」と「智謀」に関する記述を引用して、そこから逃られない自らの生き方を吐露する。マルソー氏は、秋成の著述に込められたこうした鋭い内省が『列子』からの様々な影響のもとになされている可能性を提示する。

次は、近代を対象とする二論考である。緑川真知子氏の「英国詩人ブレイクを「タオイスト」と呼んだウエイリー」は、『源氏物語』の翻訳者として著名なアーサー・ウエイリーによる「Blake the Taoist」というエッセイを取りあげ、ウエイリーが何ゆえイギリスロマン主義詩人として知られるブレイクをタオイストに比したのかを読み解く。ウエイリーは、二律背反からの脱却、知への懐疑、あるいは社会・国家を統治し束縛するもの（キリスト教）への批判といった面においてブレイクと道家思想の類似を見出している。緑川氏は、ウエイリーがその際に根拠としたと思われる『老子』『莊子』の記述を提示するとともに、ウエイリーがブレイクの時代のヨーロッパに存在したと指摘するラテン語訳『道德經』について触れ、それがキリスト教の布教に関わる極めて興味深い背景のもとに訳出されたものであったことにも言及する。

劉萍氏の「下村湖人と『論語物語』——『論語』を巡る日本の近代文学創作——」は、下村湖人の『論語物語』が、詩と道徳の調和を理想に掲げる湖人の文芸観を具現するものであり、孔子の思想と理念に対して真摯に向き合った湖人が、それを歴史から離し、時代を超えて現実の世界に通ずるものとして斬新な解釈とともに構想創作した精巧な作品たりえていることを論じる。下村湖人が描く孔子は、平凡であると同時にかつ非凡な求道者であり、謙虚で礼儀正しく懸命に学問に励む実践家であり、徳をもって愛を施す教育家でもあった。そしてそうした孔子像を自身の作品の中に描ききることこそがすなわち、現代を生きる文学者であ

り教育家であった湖人にとって自らの理想を示すための意義ある実践であったのだと説く。

最後に、雋雪艶氏の「和歌・俳句という文化の越境——「民族化」・「自由化」・「新定型化」の翻訳方略をめぐって——」は、和歌と俳句が中国語訳される際の文体と翻訳方略について、それを「民族化（伝統的定型詩）」「自由化（自由体の現代詩）」「新定型化（和歌や俳句のリズムに近い新定型詩）」の三種に分類し、それぞれの実例を紹介するとともに、問題点を分析し、理想的な翻訳方法を検討していく。雋氏は、序詞などの和歌独自の表現も翻訳に取り込む努力を払うべきこと、また、俳句の翻訳は訳文を三行に並べるのがよいと提案する。それは、それらがたとえ中国の読者に馴染みのない異質なものであったとしても、翻訳を契機として日本文学が有する特徴や美観が越境し伝えられることによって、やがては中国における文学鑑賞の基準そのものにより豊かなものとなりうるのではないかと期待されるからである。合わせて、中日文学の翻訳の問題は、文化的にも、さらには社会・政治的にも開かれた思考によって継続検討されるべきだとの提言もなされる。

以上のように、各論考の対象とする時代は上代から近現代にまでおよび、取りあげられる作品やテーマも実にさまざまである。しかし、各論考に一貫して共有されているのは、中国の文学や思想がいかに広まり、いかに享受され、継承され、またそこからいかなる文学・思想が派生することになったのか、すなわち、中国文化の伝播と再創ということへの関心と問題意識である。

日本の文学・思想は、つねに中国からの刺激を浴びつつ、それを受容し、ときには拒否し、ときには改変を加えながら消化吸収してきた。中国由来の要素は、さまざまなレベルにおいて日本文化の血肉となり、その内部に複雑に入り込んでいたのであるが、そうしたいわゆる漢字・漢文文化圏において形成され経験され

てきた特異な文化現象、文化遺産の意義やメカニズムについては、検討すべき課題がまだ多く残されている。日本の文学・思想における中国文化の伝播と再創の様相を見つめ直すことは、日本文化の本質をいっそう解明するためにも欲くべからざる作業だといえよう。

また、日本というフィルターを通して中国の文学・思想を見た場合、そこにかえって、中国においては見過ごされてしまうような中国文化の特質が浮かび上がってくることもある。さらには、こうした一つ一つの研究の蓄積をもって、東アジアの学術文化史を改めて総括し、再構築することができれば、その価値は決して小さなものではない。

なお、所収の論考からの問題提起として、緑川真知子氏の論文が扱った東洋思想と西洋思想の接触と融合ということについて若干言及しておきたい。かつて東アジアにおいては、漢字・漢文文化との接触を大きな機として、各地域の言語文化の変化発展が遂げられたわけであるが、近代以降現在へ至る東洋文化と西洋文化との接触、衝突は、これもまた新たな文化を再創していく推進力にはかならない。また同時に、西洋との出会いは、我々自身が東アジア文化を相対化し、また、その本質的意味を改めて自覚的に捉え直していく絶好のチャンスでもあるといえよう。我々は現在どのような文化環境に存在しているのか、またこれをいかに伝え継承していくべきなのか、過去の伝統とともに未来をも展望し、東アジア研究をさらに世界へと開いていく時機に今まさに身を置いているのだと感じる。

また、雋雪艶氏の論文が取りあげる翻訳の問題にも一言触れたい。雋氏は、和歌や俳句が中国語に翻訳されていく過程で、それが刺激となって現代中国の自由詩に影響を与える結果を生んだことを紹介している。中国から日本への影響ということとは逆に、翻訳という「文化」が発生させた日本から中国への影響である。

現在も日々、日本や東アジア地域のさまざまな著述や作品がさまざまな言語に翻訳され、出版されているわけであるが、翻訳という営みは日本や東アジアの著作を他言語地域に伝播させ、そこに新たな文化を再創するばかりではなく、翻訳を通して日本や東アジアの言語文化の新たな側面が再発見される可能性にも注意を払うべきことに気付かされる。

さて、右に述べてきたごとき、東アジアに開かれた研究、あるいは世界的視野からの研究が展開しつつあるという現在の趨勢は、各国の研究者が相互に往来し、共同して研究が進められる環境が整備されてきたこととも大いに関係がある。今回の国際シンポジウムの開催にあたって橋渡しを務めて下さった張哲俊氏と早稲田大学との交流の経緯については、張氏自身のあとがきに述べられているが、その端緒は、早稲田大学名誉教授の故田中隆昭先生と、北京大学教授嚴紹盪先生が、たいへん親密かつ友好的な学術交流の基を築かれたことに始まる。嚴紹盪先生は張哲俊氏の指導教授であり、田中隆昭先生は筆者の恩師である。我々いわば第二世代が、いまこうして共同の学術活動を実施していくことができるのも、ひとえに両先生が道を切り開いてくださったおかげである。ここに改めて感謝の意を表したい。

また、シンポジウム期間中、我々の分科会には、張哲俊氏が指導されている北京師範大学文学院比較文学与世界文学研究所の大学院生十数名がたいへん熱心に参加してくれた。すべての研究発表が終了した後、彼ら一人ひとりに分科会を通しての感想を述べてもらったが、みな、発表者の研究内容のみならず、研究の方法、研究の姿勢までも鋭く観察していて、海外の研究動向を直接に感じ取ることができるよい機会であったと話してくれた。そして、その彼らの言葉を聞いた発表者の方もまた、外国の研究者と一堂に会して直接議論する場を設けることの意義を改めて深く感じた次第である。

最後になったが、本書の刊行をご快諾下さった勉強出版代表取締役池嶋洋次氏のお力添えと激励に対し、心より御礼を申し上げたい。また、編集の実務を担当された吉田祐輔氏には、たいへんなご面倒とご苦労をおかけしたにもかかわらず、終始献身的にご尽力いただいた。ここに感謝申し上げます。

なお、本書の刊行には、早稲田大学重点領域研究機構の出版補助費が交付されている。関係各位に深謝申し上げます。

二〇二一年十一月二日

河野貴美子

sample

目次

序言	河野貴美子 1
陶淵明と藤原宇合——隠者による隠逸詩の創作——	土佐朋子 15
「遷都平城詔」と「隋高祖建都詔」との類似を最初に指摘したのは誰か——近世の『続日本紀』研究一斑——	高松寿夫 35
本地垂迹説における中国経典の影響——『清浄法行経』の受容をめぐって——	鈴木英之 51
神として祀られる白居易——平安朝文人貴族の精神的基盤——	吉原浩人 95
唐土、高麗と大和——『源氏物語』の異国意識、自国意識と美意識——	丁 莉 125
『源氏物語』の「ひとのみかど」と「ひとのくに」——その使い分けを中心に——	金 孝淑 149
藤原敦光『三教勘注抄』の方法——音義注を中心に——	河野貴美子 177

中世日本文学における『史記』享受の実際に関する一考察

——軍記物語と謡曲におけるその変容——

マイケル・ワトソン  
205

謡曲「班女」における「扇」と謡曲「砧」における「砧」

丁 曼  
229

絵双六起源の論争と中国の彩選

張哲俊  
249

夢の中へ——秋成作品と『列子』

ローレンス・マルソー  
275

英国詩人ブレイクを「タオイスト」と呼んだウエイリー

緑川真知子  
283

下村湖人と『論語物語』——『論語』を巡る日本の近代文学創作——

劉 萍  
305

和歌・俳句という文化の越境——「民族化」・「自由化」・「新定型化」の翻訳方略をめぐって——

雫 雪 艶  
325

あとがき

張 哲 俊  
361

執筆者一覧

363